

国際的な資質を育成する社会科学習 (3)

—様々な情報を有効に活用し社会に参画する力を育成するカリキュラム開発を通して—

柳生 大輔 石原 直久 長野 由知 池野 範男
棚橋 健治 木村 博一

1 はじめに

社会科は、平和的な社会の形成者としての資質を育成することが使命である。では、現在の社会はどのような状態で、社会科はどうあるべきであろうか。

今日の社会は、ヒト・モノ・カネの移動が急激に進み、利害関係がより複雑に絡み合っている。そのため民族・宗教・文化の違いをもとに、お互いに分かり合えず、戦争へと発展する事態が後を絶たない。

また、高度情報化社会の進展で、気がつけば自分が得ている情報のほとんどは、他国や他県からのものとなり、生活拠点である地域が見えていないという状態に陥っている。さらに、メディアによって届けられる大量の情報の中で、本当にほしい情報を得ることが難しくなっている。

そして、国際化や情報化は今後もますます進展することが考えられる。

そうであるならば、社会科は、社会の変化に適応しそのような激流の中で平和的な社会を築くことができる人材を育成していかなければならない。より広い視野で科学的な事実認識ができるとともに、他者・多国との価値観の違いを前提にしながら対話し行動できる「人」としての資質が必要となるであろう。

21世紀を担う子どもたちのために育成したいこのような資質を「国際的な資質」とし、本研究主題を設定した。

2 「国際的な資質」とは

「小学校学習指導要領解説社会編」によると、「国際社会に生きる民主的・平和的な国家・社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質」として「公民的資質」を定義している。さらに、「公民的資質はこれからの国際社会において、日本人として主体的・創造的に生きていくために必要

な資質である。」としている。

しかし、国際化社会においては、人々は国家に帰属しているという感覚よりも、地球市民的意識をもち始めている。今後ますます国際化が進むと、「国」レベルでは社会に対応できない。一人ひとりの価値観の違いを前提として、より開かれた認識形成をめざす「国際的な資質」の育成が必要である。

このように考えると今後必要となる「国際的な資質」とは国民・民族・人種といったレベルを超えた、人と人との関係を平和的に形成するために必要となる人間性であると考えられる。それは、「国家や民族、人種、宗教、文化などの違いを認め、人が人として存在するために、他者との関係を平和的に形成するために必要な人としての資質」ということができるのではないか。

3 めざす子ども像

「国際的な資質」の育成を想定した時、思いこみや人のうわさ、プロパガンダなどに惑わされず、偏見にとらわれない公正な思考・判断力が必要である。また、直接体験から得た情報からのみに依拠して生活することが難しく、情報が氾濫する今日においては自ら情報を取捨選択し活用する力も求められる。

そのため、以下のような子ども像を描いた。

- 事実を事実としてしっかりとらえる子ども
- 多面的・多角的に社会的事象をとらえる子ども
- 既知の事実をもとに未知の事柄を推し量る子ども
- 自主的・論理的に判断し行動する子ども

4 育成すべき力

めざす子ども像を受けて、社会科で身につけるべき力を設定した。小学校第3学年～中学校第3学年の7年間で「主に育成する力」を設定し、計画的・系統的

に育成していく。

○観察力

小学校第3学年・第4学年において重点的に育成を図る。科学的・論理的に社会的事象をとらえる力である。目の前にある社会的事象がどのような状態であるのかありのままの姿を把握し、分析することができる必要がある。他者とかかわりながら合意や社会参画をめざすとき、事実認識が共通していることは前提条件となる。

○批判力・推理力

小学校第5学年～中学校第2学年において重点的に育成を図る。「批判力」とは、目の前にある社会的事象を科学的に検討し、評価・判定をする力である。また、「推理力」とは、既知の事実をもとに、事実間の関係性や今後の動向など、未知の事柄を推し量る力である。そのためには、複数の資料を比較検討することが必要であり、それが多面的・多角的に社会事象を考察することにつながる。

○社会的判断力

最終学年である中学校第3学年で力点を置いて育成を図る。社会的判断力とは、観察力や批判力・推理力を基礎に社会のあり方を考え、社会問題について自主的に合理的に考える力である。実社会においては、異なる価値に基づく多様な考えの中で、自分の考えや立場を意識したうえで社会的な要素を考慮し、実行可能な選択肢を吟味し行動する力が必要である。

5 子どもの実態

これまで「国際的な資質」を育成するカリキュラムを開発してきたが、実践を通して以下のような実態が見えてきた。

○グラフや表から事実を分析することができない子どもがいる。

○調べ学習を行う際、インターネット上の情報をそのまま使用し、無批判でうのみにしている子どもがいる。

○大量にある情報にとまどい、自分に必要な情報を見つけ出せない子どもがいる。

○自分たちの身近な地域社会について知らない子どもがいる。

その理由として以下のことが考えられる。

○子どもを取り巻く状況の変化

- ・インターネットを利用しやすい環境が普及してきている。
- ・子ども向けのウェブサイトを含め、インターネット上の情報量が急激に増加している。
- ・子どもが地域にかかわる機会が減少している。

○子どもたちの実態に合った資料提示ができていない。

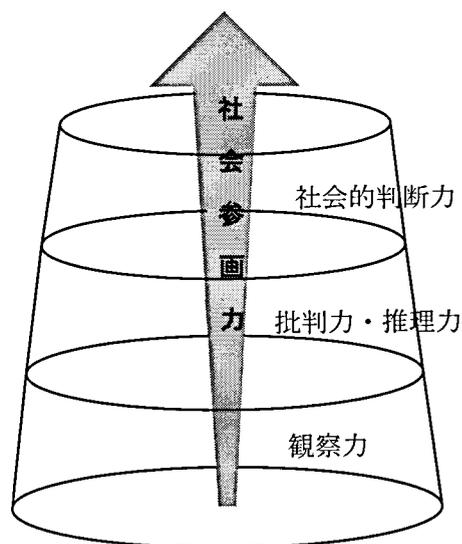
これは、情報を取捨選択し、有効に活用することが身についていないこと、実社会に対する関心が低いことを意味している。

そこで、本年度は、情報活用の弱さを克服するために、観察力に重点を置いて育成を図る必要があると考えた。また、実社会に対する意識の薄さを解消するために、学習で身につけた力を身近な社会で活用させることで、実社会に進んで参加する社会参画力の育成に重点をおいた。

6 社会参画力の育成

6.1 社会参画力とは

社会科で身につけた力を、実社会で生きてはたらく力に高める力であり、学び取った知識や理論を駆使し、よりよい社会を形成していこうと進んで社会に参画していく力である。ここでは広く、共通の目的や問題解決に向けて他者とかかわりながら、習得した知識や技能を活かし、問題の解決を行う力も含めている。



社会参画力のとらえ

6.2 社会参画力育成の方法

社会参画力は身につけた観察力、批判力・推理力、社会的判断力を活用する力であるため、特定の学年で重点的に育成するというよりも、小学校第3学年から中学校第3学年までを視野に入れて育成をめざす。特に小学校第5学年生以上が行う選択社会科においては、社会参画力を特化して育成することとした。

○必修社会科

必修社会科においては、共通の目的や問題解決に向けて他者とかかわりながら習得した知識や技能を生かし、問題の解決を図ることに力点を置いた。その際、

観察力を重点的に育成するために、子どもの実態を考慮して資料を作成するようにした。具体的には、学習で用いる資料について、子どもとのかかわり、発達段階とのかかわり、学習目標との整合性という視点で吟味を行った。

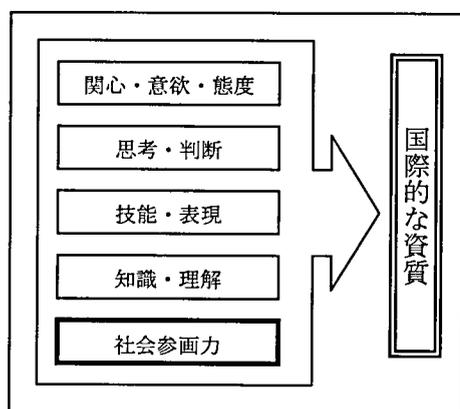
○選択社会科

選択社会科では、社会科学習や社会的事象について強い興味をもつ子どもが集まって学習を展開することから、既習の知識や技能を活用しながら、新しい文化を創出し社会に参画することに力点をおいた。学習内容は子どもたちと教師とで決定する。そのため学習内容は、未来の社会の成員として直面するであろう問題といった、発展的なものになる。

選択社会科のテーマ例

学年	テーマ
小学校 第5・6学年	「わたしも三原の主人公」 ・土曜テント市をもっと魅力的にしよう ・オリジナル「神明市パンフレット」をつくろう
中学校 第3学年	「日本に裁判員制度は必要か？」

評価にあたっては、従来の4観点に加えて社会参画力についての観点を設定した。振り返りカードを使って一人ひとりの伸びや変容を確認できるようにしながら育成を図ることにした。



国際的な資質の評価の観点

7 必修社会科実践事例 小学校第3学年生

7.1 単元名

○「わたしたちのまち みんなのまち ～学校のまわり～」

7.2 単元について

学校周辺には、商店が集まる地域、住宅が集まる地

域、寺や神社が多い地域、公共施設が多い地域など、場所によって様子の違いが見られる。中でも、商店が広く分布している駅南側は、子どもたちにもなじみのある地域である。

しかし、社会科学習がスタートしたばかりのこの時期、子どもたちは学校周辺地域を身近だとは答えるものの、位置関係はあいまいで学校からの道を問われると答えることが難しい実態にあった。また、商店がどの程度の範囲で分布しているかということや、分布の背後にある交通や人通りといった社会的な要因に対する意識はほとんどない。

また、第2学年時に校外に出て標識探しなどの学習を行っているので、○○探しといった視点を絞っての観察をすることはできている。しかし、量や数に着目して分布を把握したり、一度にたくさんものを比較したりすることには難しさを感じているようである。

7.3 手立て

観察力を育成するにあたって、二つのものを比べてその量や数の違いを読みとるということねらいとした。町探検の際には、商店と住宅の数を視点として観察を行い、絵地図も色分けをして分布が視覚的に分かりやすくなるようにした。教師が資料を作成する際にも、自分たちの生活と結びつけやすいようより具体的な資料選びをすること、視覚的にとらえやすいものになるように心がけた。

7.4 単元の目標

- 学校周辺の土地利用に関心をもち、意欲的に調査・観察を行うことができるようにする。
- 学校周辺の様子の背景を考えることができるようにする。
- 探検した結果を絵地図に表すことができるようにする。
- 学校周辺の様子には場所による違いがあり人通りとかわりがあることが分かるようにする。

7.5 単元の計画（全12時間）

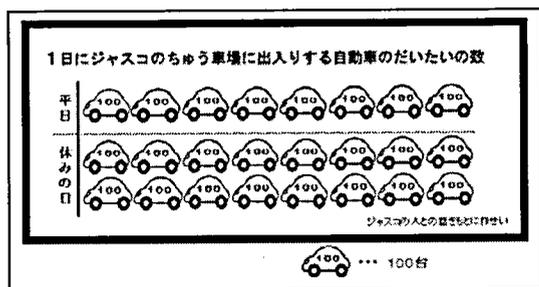
- 第1次 お気に入りの場所を紹介しよう……………1時間
- 第2次 学校のまわりを探検しよう……………6時間
 - ・本町コース、中之町・東町コース、港町・円一町コース、城町コース
 - ・地図記号を使って絵地図にまとめよう
- 第3次 学校のまわりの様子を交流しよう……………4時間
 - ・絵地図から分かることを交流しよう
 - ・商店の多いところにズームイン！
- 第4次 学習したことをまとめよう……………1時間

7. 6 学習の実際

単元第3次において、一見同じように商店が広がる地域でも、そこを歩き来する人通りには特色があることに気づかせ、地域の様子に対する理解を深めさせたいと考えた。事例として、青果などの販売を行っている「四季園」を扱った。「四季園」は、休日には大きな駐車場をもち、家族連れが利用しやすい大型ショッピングセンター前に、平日には通勤、通学などの人々

が利用しやすい三原駅南側に出店している。

駅周辺の人通りについては、駅へのバス到着時刻表を、大型ショッピングセンター前の人通りについては、駐車場利用状況を、それぞれ平日と休日に整理して提示した。バスの時刻表には到着本数に番号をふり、駐車場利用状況については大きな数字を提示するのではなく、自動車のイラスト（100台で)で表示した。



ジャスコの平日と土日の駐車場利用数



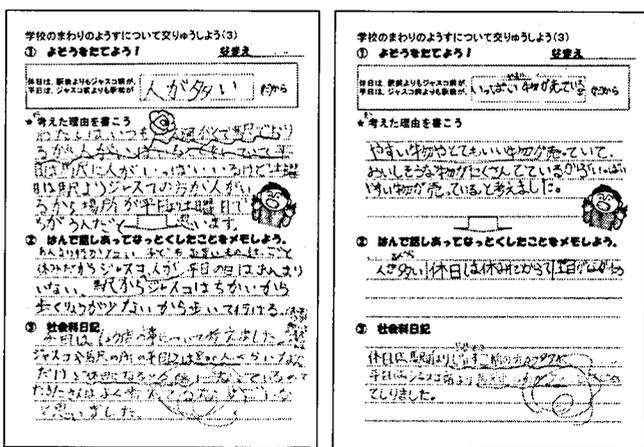
平日と土日の三原駅着バス時刻表

○ 学習過程

学習事項	学習活動	教師の働きかけとねらい
1. 学習課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 曜日で営業場所を変えているジャスコ前と駅前の四季園について知る。 ○ 四季園の店員の言葉から、課題をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 資料を提示しながら店の説明をし、学習に興味をもたせる。 ○ 「土日はジャスコ前で平日は駅前がいい」という言葉から、疑問をもたせる。
なぜ「土日はジャスコ前、平日は駅前がいい」のだろう		
2. 学習課題の追究	<ul style="list-style-type: none"> ○ ジャスコ前と駅前の様子がどのように違うのかを予想し、「土日（平日）は、駅前（ジャスコ前）よりもジャスコ前（駅前）の方が～だから」の「～」に入る言葉と、その根拠を書く。 ○ 班で意見交流をして考えをふくらませる。 <ul style="list-style-type: none"> ・平日には学校があるからバスに乗るけど、休みの日には乗らない。 ・ジャスコに行くのは土日が多い。 ○ 全体で交流をして、交流したことを資料で確かめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりジャスコには土日に客が多い。 ・バスの利用者は平日が多い。 ・土日には買い物のためにジャスコ前を歩き来する人が多い。 ・平日は通勤や通院などで駅周辺を歩き来する人が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 曜日によって品質・価格を変えているわけではないことを伝え、歩き来する人の数に着目できるようにする。 ○ 町探検で感じたことや生活体験を通しての事実を根拠にさせる。 ○ 交流したことを資料で確認させ、歩き来する人の数が曜日によって異なることに気づくことができるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・平日と土日の三原駅着バス時刻表 ・ジャスコの平日と土日の駐車場利用数
3. 本時のまとめと発展	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ジャスコ前は土日が、駅前は平日がいい」と言った店員の言葉の意味をふりかえり、次時の学習内容を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習を通して大切だと思ったことを使って社会科日記を書かせ、学習を振り返ることができるようにする。

7. 7 結果とまとめ

全員が駅周辺と大型ショッピングセンター前の人通りの違いに気づくことができた。生活体験をもとに予想をさせて目的をもって観察することができたためであると考えられる。平日と休日といった二つの視点に整理した視覚的にわかりやすく加工した資料は、第3学年段階でも有効であった。



授業後のワークシート

場所による人通りの違いに気づくことで、三原駅周辺で行われている祭やテント市について、人通りを増やすためにしているのではないかといった自分なりの考えをもつ子どもが増えた。

一斉場面で資料を提示したため、一人ひとりがどの程度資料を読みとることができたのか把握が難しかった。一人ひとりの実態を把握し、資料を読み取る能力を向上させるためには、個人で資料を読みとる時間を保障する必要がある。また、視覚的に、直感的に量や数が把握できる力だけではなく、一つの資料をじっくりと観察して、複数の情報を読み取るができる力を高めていく必要がある。

8 選択社会科実践事例 小学校第5学年・第6学年

8. 1 単元名

○「私も三原の主人公パートI ―マリンロード土曜テント市を盛り上げよう―」

8. 2 単元について

私たちの郷土三原も他の地方都市と同じように、市中心部の商店街は人通りが少なくなってきており、シャッターを閉めたままの店や空き地が増えてきている。市民の多くは、大型駐車場を完備した大型スーパーで買い物を行い、自動車で買い物をするには不便な、昔ながらの商店街は利用しなくなってきた。現在三原市役所や三原商工会議所、商店街の人々は協力して、「市中心部（駅前）の賑わいを創出し、明るく元気な

三原市にしよう」と様々な活動を行っている。

JR三原駅と三原港を結ぶ道路沿いにマリンロード商店街があり、以前は三原駅、三原港を利用する通勤・通学の人たちが行きかい、多くの人々が利用し賑やかであった。しかし現在は、通勤・通学の人たちも減少し、以前の賑わいは姿を消している。

このような状況の中、市中心市街地の再活性化のため、地元駅前商店街振興組合が実行委員会を組織し、「マリンロード土曜テント市」を行っている。この事業は、マリンロード（市道）に店を持つ三原駅前商店街が主催し、その一部で朝市やイベントを行うことで、商店街に直接親しみを感じてもらい、市民の日常の買い物や観光客等の人の流れを呼び戻したいという願いから開催されている。

この「土曜テント市」は毎月第4土曜日に行われ、新鮮野菜や生鮮製品の即売会、和洋菓子各種、二重焼き、広島菜漬けの販売などが行われている。開催されはじめて一年が過ぎ、市民には徐々に認知されてきているが、市外からも含めて来場者数は増えていない。

市中心市街地の賑わいをどのように図っていくのかという問題は、現在三原市が抱えている問題の一つである。そしてこの問題は、三原で育ち暮らしていく子どもたちにとって、将来、郷土三原をどのようなまちにしていくのか考えていく上でも重要な問題でもある。

そこで、市中心部の賑わいを創出するために、自分たちのできることを考え提案することを通して、子どもたちに三原市の一員としての自覚をもたせるとともに、郷土に対する愛着やほこりを育てるようにする。また、今まで必修社会科で学んだことを実地に生かすことにより、地域社会に積極的にかかわり、より地域社会にしていく力を育成していこうと考えた。

8. 3 単元と必修社会科とのつながり

本単元は、必修社会科小学校第3学年の「私たちの市の様子」、第4学年の「郷土に伝わる願い」との関連をもとに学習を展開していった。

第3学年「私たちの市の様子」

(主な目標)

- 学校周辺の人の集まりや商店、公共施設の分布と交通条件のつながりを考えることができるようにする。
- 買い物調べをし、消費生活に興味・関心を持ち、消費と販売について、商店の工夫や消費者の立場などから多面的に考えることができるようにする。
- 地域生活は商店の働きによって支えられ、消費活

動や販売活動が互いに影響していることを理解することができるようにする。

第4学年「郷土に伝わる願い」

(主な目標)

- 多くの先人の工夫や努力の積み重ねにより、今のわたしたちの生活があることを理解することができるようにする。
- 郷土三原が、港や鉄道、道路網の整備を行うとともに、干拓により市街地をひろげることで発展してきたことを、現在の市中心部の様子から理解することができるようにする。

8. 4 単元の目標

- 市中心部の現状について興味・関心をもち、私たちの三原をよりよいまちにするために、自分にできることを考え、意欲的に活動しようとする。
- 市中心部の商店街の現状を車社会の発展や生活様式の変化からとらえることができるようにするとともに、再び市中心部の賑わいを創出し、明るく元気な三原市にするための方法を考えることができるようにする。
- 市中心部の賑わいを創出するための企画やアイデアを絵や図でわかりやくまとめることができるようにする。
- 市中心部が衰退していった原因を理解し、市役所や商工会議所、商店街の方々の思いや工夫を知ることができるようにする。
- 今までで社会科で学んだことを生かしながら、友だちと共に活動することを通して、地域社会の一員として地域に積極的にかかわり新しい三原市を創りだそうとすることができようにする。

8. 5 単元計画 (全7時間)

- 第1次 マリンロード商店街の方々の活動から三原の現状を知ろう……………1時間
- 第2次 土曜テント市にたくさん人が来てくれるプランを考えよう……………4時間
- 第3次 自分たちが立てたプランを検証しよう2時間

8. 6 学習の実際

第5学年の子どもたちは、昨年度、土曜テント市について学習をしている。三原市役所の経済商工振興課(マリンロード土曜テント市担当)の方と三原駅前商店街振興組合の代表の方に来ていただき、土曜テント市をはじめようと思ったきっかけや、この土曜テント市にかける思いを伺った。子どもたちは、関係者の

方々の郷土三原の発展を願う思いにふれ、三原の現状について興味、関心をもつようになっていった。その後子どもたちは、「マリンロード土曜テント市」のポスターを作成し、土曜テント市で展示してもらった。

今回子どもたちは、土曜テント市にたくさんの人に来てもらうために、どのような方法があるのか、第5学年の子どもが昨年度取り組んだ「マリンロード土曜テント市ポスター展」をもとに考えていった。「ターゲットを絞ったアイデアを考えた方がいい。」「子どもがたくさん来れば、その親も来るようになる。」「駅前だし、普段から電車やバスをよく利用するお年寄りの人たちをターゲットにしたらどうかな。」など、子どもたちは、「駅前」という立地や、どんな人たちがマリンロードを通行するのか、どのような工夫をすればお客さんは喜ぶのか考えながらアイデアを出していった。

授業後のワークシート

子どもたちが考えたアイデアは「マリンロードのマスコットを募集する。」「ゲームコーナーを設ける。」「フリーマーケットを行う。」「お茶席を設ける。」などであった。確かに、今まで行われていないものであるが、「どのように行うのか」「行う上での課題は何か」というとらえが弱く、実際に行うためにはいくつもの

解決すべき課題があるものばかりであった。子どもたち自身にその課題に気づきかせ、自分たちの案を見つめ直させるために、実際に駅前商店街に行って様子を観察させたり、商店街の方々の意見を聞かせたりした。

子どもたちは、商店街の隅々まで観察したこと、商店街の方々の生の声を聞いたことで、マリノード商店街について再認識するとともに、自分たちの案について見つめ直すことができた。

- 子ども向けや、家族向けのお店が少ない。
- お店の種類が少ない。
- 全国チェーンの有名なコンビニエンスストアがあり、そこでほとんどのものが買え、わざわざ他のお店に行こうと思わない。
- 昼営業しているお店、夜営業しているお店など、お店の営業形態がばらばらで、どのお店にも有効な対策がとりにくい。
- 土曜テント市にたくさん人が来たとしても、それがそのまま商店街の売り上げ増に結びつくわけではない。そのため、お店によって土曜テント市に対する思いが違う。
- マスコットにしてもお茶席にしても費用がかかる。しかし、費用をかけたとしても、商店街の売り上げが伸びるのかわからなかった計画は実行できない。
- 商店街みんなの意見がまとまっていない。

これらのことをもとに、みんなで話し合い、自分たちの案を見つめ直した。お客さんがたくさん来るための条件は、「駐車場がある・ない」だけではなく、自分たちの消費行動と関連があることを知ることができた。

また、ターゲットを明確にし、そのターゲットにあった工夫を行うことが重要であるが、常に「費用対効果」を考えないといけないことも知ることができた。さらに、商店街全体がまとまって対策を立てることが重要であるが、みんなが納得する考えをまとめるのは困難であることも知ることができた。この学習を通して、子どもたちは、三原市内の人たちではなく、市外から多くの人に来てもらうためにはどんな工夫が必要なのか考えをふくらませていた。

9 選択社会科実践事例 中学校第3学年

9.1 単元名

- 「日本に裁判員制度は必要か？」

9.2 単元について

2009年（平成21年）から実施される裁判員制度の学習を通して、日本の司法についての理解をより一層深

めることが目的である。私たちの生活は、他者とのかわりの中で成立している。お互いに相手を大切にするのはもちろんのこと、権利を尊重し義務をはたしながら生きていくのだが、すべてが理想的にしかも円滑に結論づけられるわけではない。様々な意見の食い違いや対立を、話し合いによる平和的な解決で乗り越えてきたのである。その際に、人間の英知によって作りあげられたものがルールであり、そのルールの中で生活をおくるといふ仕組みを長い年月をかけて培ってきたのである。にも関わらず、ルール=法を身近なこととして私たちは受け止めているだろうか。ややもすると、遠い存在として見ていないだろうか。

司法をより身近なものとしてとらえ、私たちと司法の関係をより明確なものにしていくこと。また、裁判員制度の必要性を、資料を収集して事実の把握につとめ、その事実から内容をつかみ、自分の価値判断を理由とともに述べるができるよう、批判力や判断力、構成力をふまえて意見提示をしていくことが大切であると考える。21世紀の社会を生きる生徒たちに求められている力をつけていくための題材として、裁判員制度をとりあげることは価値あるものであると考えた。

9.3 単元と必修社会科とのつながり

本単元は、必修社会科公民的分野の民主政治と政治参加との関連をもとに設定している。そこでは、司法権の役割と機能について理解すること、訴訟過程とその役割について理解すること、三権分立の意義とその役割について理解することをねらって学習を行っている。しかし、必修教科においては、司法の仕組みを概略的に学習し、基本的な理解にとどめ、細かな組織や働きについては深入りしないことが求められている。

そこで、選択学習では、必修社会科で学習した内容をふまえて、発展的な学習として、新たな制度として採用された裁判員制度の必要性を考えることにした。

9.4 単元の目標

- 必修教科で学んだ知識や理論をもとに、裁判員制度について具体的に調べ、その実状を理解し、制度の是非を集団の学びの中で思考判断し自分の意見を育む。
- 自分の考えを、他者の考えと比較検討しながら再構成し、裁判員制度の是非を提案する。

9.5 単元計画（全30時間）

- 第1次 司法制度を調べよう……………4時間
- 第2次 広島地方裁判所に行こう……………3時間
- 第3次 裁判員制度を調べよう……………7時間

- 第4次 裁判員制度についてディベート…………… 4時間
- 第5次 意見交流…………… 6時間
- 第6次 学んだことをまとめよう…………… 6時間

9. 6 学習の実際

第3学年19名の活動を紹介します。まずは、司法制度の仕組みなど教科書に書いてある基本的事項の確認を行った。次に、裁判員制度で扱う刑事裁判について理解を深めるため、日常におこる事件や裁判の判決に関する新聞記事を収集し、それらの内容理解に努めた。

ある程度概要がつかめた段階で、実際に裁判を見学することにした。その際、広島弁護士会が主催する裁判傍聴セミナーを利用させていただいた。担当の弁護士の方の案内のもと、詐欺事件についての刑事裁判を見学した後、生徒たちの質問に答えていただいた。この学習により、生徒たちの既習内容がより具体化したようである。

裁判傍聴後、自分たちの質問に対する弁護士さんの答えや見学の感想をまとめ、いよいよ裁判員制度についての学習にとりかかった。新聞やインターネットなどの数多くの情報を集めた。資料を読めば読むほど疑問も増え、情報や知識を整理することに戸惑いながらも、理解を深める努力を続けた。

その後、裁判員制度について、制度の是非を考えるディベートを行ったり、模擬裁判をクラスの中で行ったりする中で内容理解を深めた。また、第8学年生徒や公開研究会で来られた外部の方を対象とした選択学習発表会を行い、裁判員制度についての内容理解を深めることができた。

10 成果と課題

本年度は、観察力を強化し、社会に参画する力を育成することで、「国際的な資質」の育成を図ろうとしてきた。

子どもたちにとって身近で、発達段階を考慮した資料加工や提示の工夫を行うことで、効果的に事実をとらえさせることができた。また、そうすることで社会事象についての理解を深めさせることができた。

また、身近な事例を扱いながら社会参画を意識して学習を展開することで、目的意識をもって学習が行われ社会科学習に対する意欲を喚起することができた。社会参画力の育成をめざす学習展開は、社会を知る、社会を分かるために有効であった。

しかし、「国際的な資質」を、「よりよい社会を形成していく資質」ととらえた時、今年度の取り組みは、社会に適應する力の育成にはなっていない、よりよい社会を創り出す力の育成にはなっていなかった。21世紀を担う子どもたちに求められるのは、社会に主体的に参画し、他者との関係を平和的に形成しながら、よりよい社会を創造していく力である。そのような社会科学を構築するために、社会参画力の発達過程や育成の方法を明らかにすることを今後の課題としたい。

引用(参考)文献

- 1) 文部省「小学校学習指導要領解説 社会編」,平成11年5月, pp.13-14
- 2) 柳生大輔,村上忠君,石原直久,池野範男,棚橋健治,木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(1)」,広島大学学部・附属共同研究紀要,第34号,2006
- 3) 柳生大輔,石原直久,徳本光哉,池野範男,棚橋健治,木村博一「国際的資質を育成する社会科学習(2)」,広島大学学部・附属共同研究紀要,第35号,2007
- 4) 広島大学附属三原学園[編著]『21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発』,明治図書,2005